家庭雜誌

第四拾貳號

時　時是れ金。

地震の効用　亦不思議なる効用にあらずや。

つれなき生命　蜜柑花の香は、樹下に立てる年少武士の戒衣を、身重きまでに薫染せり。

シヤーマン將軍の逸事　彼は米國南北戰爭の日に、北軍に名高き勇將なり。

頭巾二つ　寄せ來る千里鄕國の思。

新刊

十二文豪 第七卷

塚越芳太郎著

近松門左衛門

定價十八錢 郵税四錢

目錄

◉肖像◉近松自筆戯曲原稿（石版刷）◉年譜◉序言、近松門左衛門◉現實界に於ける彼、第一◎其一、元祿の日本◎其二、彼の生涯（上）◎其三、彼の生涯（下）◎其四、彼の詩人的生涯◎其五、彼の著作◎其六、彼の文章（上）◎其七、彼の文章（下）◎其八、彼何人ぞ◉理想界に於ける彼、第二◎其一、彼の人生に對する觀念◎其二、彼の男性に對する見解◎其三、彼の女性に對する見解◎其四、彼の社會に對する見解◎其五、彼の宗敎道德に對する見解◉結論、彼は多くの類似に於て日本の沙翁なり◉附錄◎近松門左衛門著作表◎近松門左衛門著作一斑◎日本戯曲史

征清の大軍海を渡て大陸に入り、大勢潮の如く、國民の意氣方に昂れり。大なる日本は將に世界の極東に打建てられんとす。此の千歳の一時に際して、「近松門左衛門」出づ。其意外なるを驚くこと勿れ、其時を知らざるを笑ふこと勿れ。槊を横へて猶詩を賦し、軍中猶書を講ずるにあらずや。堂々たる大國民の胸中焉ぞ其間に千古の詩人を永評するの閑日月なからん。

日本の元祿あるは猶は英國のエリサベス時代あるが如きなり。元祿の近松門左衛門あるはエリサベス時代のシエーキスピアあるが如きなり。其高下の同じきや否やは我知らず、然れども英國民にしてシエーキスピアを有するを誇るの權理あらば、我亦近松を有するを誇る能はざらんや。

日本開國而降三千年、能く人生を諷詠したると復た彼が如くなりしものあるや乎。將に來らんとする日本は如何に誇るべき詩人を有するやを知らず、去れども已に去りたる日本は思想史上の大立物として此の千古の詩人を推さゞるを得ざるなり。嗚呼彼、近世榮華の絕頂に立ちて、歡樂窮りて哀情多き人生を永嘆す、其永嘆や直に日本思想の花たり。此書は則ち此の誇るべき詩人の生を叙したるもの、殊に意を用ゐて思想界の生涯を叙したり。然れども其叙し得て眞相に近きや近からざるやは讀者自ら之を判して可也。

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

家庭叢書第五卷

小兒養育

定價十錢
郵税二錢

本書は專ら小兒の身體を養育する方法を例の平易明白の文章を以て最も親切丁寧に説明したるものなり則ち(一)現今の小兒養育(二)懷妊中の心得(三)母の乳(四)乳母の乳(五)牛の乳(六)小兒の食物(七)入浴の心得(八)小兒の身體及看護(九)小兒の衣服及寢具(十)小兒の衛生等なり

再版

家庭叢書第四卷

家庭教育

定價十錢
郵税二錢

本書に對し各新聞の批評は實に如左也

◎新家庭の建設に熱心なる民友社の家庭叢書は既に第四卷に及べり本書は家庭の教育に關して父母の位置、職務、言語の開誘、書籍の選擇等其あらゆる事項に付或は理論より説き或は實際より徵して新家庭を造らんとを誘導奬勵せり文章は例の平易明白(讀賣)◎同じ叢書の第四卷、前卷は專ら玩具の撰擇に關して縷説し本卷は廣く兒童に對する父母の心得を説明せり(一)家庭教育の本旨、(二)父母の職分、(三)家庭教育の陥り易き弊などよりはじめて小兒を薫陶する種々の方法を示したる、文章例の平易にして俗耳に入り易し、二書共に親たる人の一讀を要す(早稻田文學)

三版

家庭叢書第一卷

家庭の和樂

定價十錢
郵税二錢

再版

家庭叢書第二卷

夏の家庭

定價十錢
郵税二錢

再版

家庭叢書第三卷

玩具と遊戲

定價十錢
郵税二錢

新刊

家庭叢書第六卷

家庭衛生

定價十錢
郵税二錢

本書は例の簡易明白の文章を以て最も精細に最も實用的に左の諸件を記述せり曰く(一)家庭衛生(二)食物の節用(三)居住の善惡(四)衣服の撰擇(五)日々の衛生(六)婦人の衛生(七)簡易療法(八)家庭看護等あり、家庭衛生家の必讀を要す

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

明治二十七年十一月二十五日發行
家庭雜誌第四拾貳號

目錄



家庭雜誌第四拾貳號

（明治廿七年十一月廿五日發兌）

社説

時

（時を善用すべき事）

信なる哉、陶淵明の詩に云く、『盛年重ねて來らず、一日再び晨なり難し。時に及んで當に勉勵すべし。歳月は人を待たず』と。

實に眼前「一分」の失ひは人生五十年中の「一分」の失ひなり。眼前「一秒」の失は終天復た之を得ることの期なき「一秒」の失なり。今日之を爲さずして猶明日ありといふこと勿れ、明日の日はたとへ今日に變らざるの日出るとも竟に是れ今日の日にあらざるにあらずや。

若しこゝに人ありて途上に拾錢の銀貨を遺失せん乎、其人は必ず深く之を惜みて其能ふだけは之れを尋ぬべし。僅に拾錢の一銀貨にして且つ然り。更に之を千圓百圓ならしめば何如。再び得ることの道ある富さへ其遺失を惜むこと此くの如し。況てや終天復た得べからざるの「時」をや。

然れども人は往々に此の再び得るの道ある富の遺失を惜むこと深きに係はらずして、再び之を得るの道なき「時」の遺失を輕視することあり。是れ實に事の本末輕重を顛倒するの太甚しきものと謂はざるべからず。

諺にも『時是れ金』といへり。「時」は一方に花恥かしき美人の面にも見苦しき老の年波を疊むを遠慮せず、又如何なる大人豪傑をも休息なしに墓邊に驅て遂に之を社會の舞臺外に押落すを猶豫せざると共に、一方には化して黄金ともなり、而して天上の星も地上の沙も勉強して已ざれば之を聚め得せしむ。唯之を善く用ふ

ると善く用ひざるとによりて然るなり。

『人常に「光陰」の短きを歎すれども善く之を用ふれば自ら足りて餘りあり。』とは古人もいひき。人の一生に於て當然之を爲すべきことは人一人に分賦せられたる其百年五十年の壽命にて充分に成し得らるべきの事たり。故に之を爲さずして醉生夢死するは、極言すれば天與の「時」を偸む竊盜とも申すべく、懼れても又懼るべく、愼みても又愼むべきことならずや。

左らば如何にして之を善用すべき乎といふに、他なし零砕の「時」を空ふせざるに在るなり。零砕の「時」を空しふせざるは、主として日々一定の順序によりて事に從ふに在るなり。言ひ換れば豫め一定の「時間配當表」を製り置きて、精確に之れを履行するに在るなり。

其故に、人は事に從ふの間よりも事を擇ぶの間に於て多くの「時」を費すものたり。朝々事に當る前に先づ何れの事より始むべき乎と思案する「時」は少なからざるの「時」なり。或は甲の事より乙の事に移るに當りて同樣の思案を繰返す「時」も亦少なからざるの「時」なり。若し豫め其何れの「時」に起き、何れの「時」に寢ね、何れの「時」に何事をなし、何れの「時」に食ひ、何れの「時」に遊息し、何れの「時」に讀書し、何れの「時」に談話すべき乎等を定め置き、以て嚴格に之れを實行するときは、此等の思案の爲に費すべき無益の「時」を要することとなきのみならず、兼て心身の秩序を保ち、又事業の成功を早め、而して「時」を經濟すると同時に腦力をも經濟し、以て心身の健康と事業の成功とに大なる利益を得べし。北米大陸の君子フランクリンが此方法によりて成功したることは人の熟知する所にあらずや。日耳曼の人メランクトンが自ら失ひし「光陰」を冊子に記しおきて、他時勉强して之を補償したりといふは世の記憶する所にあらずや。

零碎の「時」も聚りては大なる「時」たり、毎朝「一時」の早起も、其年の暮には三百六十五時即ち十五日五時の贏餘となるべく、十年には百五十二日二時となり、人生五十年の間には二年卅日十時を剩し得べし。二年一月の「時」は亦一個の大なる事業を成得べき「時」にあらずや。古人が人の壽命を測るに、生存の歳月を以て之を短長せずして、其成功したる事業の小大を以て之を定むべしとしたりしも、蓋し宜なりと申すべき歟。

科學

地震の効用

近年所々に大地震續き起りてより、地震と云ふ聲は、電氣の如くに人の神系を打ち來たれり。鼠の小走りにも、往來の車の響にも、耳は靜まり、足は中に浮かぶは、その恐ろしさを思へばなり、驕り誇りたる都の繁華を一時に飲み、幾百千の人命を落し、最も堅固と恃みきつたる大屋大家を打破り、會々殘るものあるも、憐れはかなき破れ屋の寫眞中に入るその殘酷、地震に勝りたるはなかるべし。

然るに之れを世界に於ける、最も必要なる道具の一なりと云ふ時は、甚だ怪しむべきに似たれども、地震なくしては今日の世界は已に數千年の昔に消へしなるべし、よし以前に消へざりしとするも、今日以後長くは續かざるべし。人類が地上に生存するを得るは、專ら地震の力なりと云ふも不可なきが故に、地震は世界の最も必要なる道具なりと云ふ也。

さて此地球上に大陸島嶼の起りてより、地球上には絶へず戰へる二個の動力あり、一は建設力にして、一は破壞力なり。破壞力の一として算へらるゝは海也。海は晝夜絶へず陸を打ちて、陸と島と破わさんとせり。海の中に土の多く流れ込むに隨たがひ、水は漸く嵩ま

りて、陸の上を犯し、いよ〳〵強く之れを破わすに至る。その一例として知らるゝはステチス島の冬の有様なり。千八百二年の事なりき、長さ八尺二寸、巾ば七尺、厚さ五尺一寸の大岩波のために誘はれて、十五間の先きに飛び流されしとあり、ローチスと云ふ所にては、二十五丈の長き洞空人の彫刻したるが如く美事に岩面に穿がちしとあり。英國の海岸フランボローよりホルドルチスに至る迄の大西洋に濱せる海岸は、格別破壊の甚だしき所にして、今日の遊歴者が、漠々たる砂地の堤として何氣なく見過ごして行くその荒野は、昔し一のヨークシャイヤー地圖面によりて見る時は村と都府のありし繁華の都跡なりしとを知り得べし。ハムバーも亦た然り、ラベンスホルグ、嘗てハールの敵たりし頃、エドワード、バリオル帝英國の貴族と同盟を結すびて、此の地よりスコットランドに攻め入りし地なり、下つて千三百九十九年に至り、彼のリチャー



ド二世を貶黜するの地として定められし、歷史上有名なる所なるも此地や。今は無考へなる波の呑む所となり、海中の眞砂はその古跡を流がし去れり。海岸と云へは、何れも破ぶれつゝあるは大小の差あるのみなれども、英國のノーフオク、サフーク邊の海岸は、格別破壞の速かなるとは、學者によりて調べられたり。ミリシハムと云ふ所に、一軒の旅店ありき。家は風景明美なる海岸に、水を少し離れたる所に建築したりしが、息子の一代たゝざる内に、海は家に迄進み來り、家は他に轉つされたり。その間僅かに七十年なりき。初めの中は年々二尺三四寸つゝの陸を海に取れしが、近邊の陸の低くまるに隨たがひ、波の勢力漸々增し來り、千八百二十四年より、同九年に至る五年間には、少なくとも四丈二尺五寸の土地を失なひたり。それのみならず、千八百二十九年の測量に、軍艦を浮かぶるに充分なるその邊の海中は、一世紀の以前には、五十尺の大岩の上に、堅固なる家屋の立ちし所なりとは、聞きても驚くべき談しならずや。

こは海に付きての談しなれども、世界を破壞するものは尙ほ種々あり。中にも雨の力は中々輕ろく見過すべきにあらず。雨が山林原野を洗らひて、之を川にそゝぎ、川は之れを海に流す。その土の分量は、集むれば數年にして大島をも作るべく、大山をも作るを得べし。一地方にあらず、一國にあらず、全世界の上に、數十百千萬年以前より、同じ力を以て破壞を試みたる雨の力と波の力と、外にも、風や、動植物の力を合する時は。此の世界は已に早やき以前に人類を上すべき陸を失なひて、水は全世界一面を掩へるなるべし。然るに猶ほ今日の如く人間の樂土たるは全たく、地震の力也。

地震は人類の計りも得ざる大力を以て、地を中心より振動し、高き所を低くむるともあれども、低き所を高

むると又ゝ少なからざるなり。千八百二十二年の十一月の事なりき。南亞米利加の智利國に於て、大地震ありき。その震動は、廣くして且つ强よかりければ、海濱に住せる人々は、皆な海中に落さるべく覺悟して、生ける心地も無かりしが、夜明けて翌朝となりけるに、不思議や昨日迄海中深き彼處に隱れありし岩は、貝の滿面に着きたるまゝ、忽然として海面に顯われ出で、昨日迄海々と呼ばれし、百哩の間は、今日は新しき陸地となり、海中の舟の通路のために立てたりし標木は、今日は陸上車道のしるしとなりたり。この地震は、海邊を高めしのみならず、廣く內地の地盤をも高めたり。海邊より一哩隔だゝりたる所に一の水車場ありき。幾十年の間、小唄歌ひつゝ働きし水車は、その日の地震のために、甚だしき變化を受けたり。その變化と云ふは、昨日迄水平に流れたりし河水の、一夜の間に、一尺四寸の高さある瀧と變じたるとなり。尙ほバルパイソーにては、三尺を高められ、クウ井ンテローにては四尺の高さを增せりと云ふ、それより十三年の後に、再び智利に地震ありて、此の度は二尺づゝ土地高まりしが、後二年にして再び地震あり、こたびは實に八尺の高さを增せりと云ふ。

是等はたゞ一例を上げしに止まれども、何れの國の歷史をしらぶるも、地震は土地を落すのみならず、又た甚たしく土地を高かむるとは明か也。現に我が東京にても、淺草邊は昔は海苔の取り得べき海なりしと云ふ、若し法地震なかりせば世界は雨のため海のため疾くに破壞せられしならんに之に抵抗して世界を維持するは地震の力也、故に地震は恐ろしきいまわしきものにあらずして、世界をして今日あらしむる命の親とも云ふべく、實に必要欠くべからざる道具にして宇宙の仕組は時計細工よりも微妙にして計り知るべからざるを感ずべし。

文藝

つれなき生命（上）

秋は暮れなむとす。此程の木枯らしに、銀杏や、紅葉や、梧や、一齊に飛んで、落葉庭に滿つるの所、はら〱と降り來る時雨の音聞きて瞑目沈想すれば、奥山住居の心地もせらる。見る〱ばらりと散る茶山花、雨に點頭く菊の花、寂寞として暮れ行く秋の物淋しさに、物語の本など翻へし讀む。中に西班牙に關する一件の物語あり。

西班牙の國、今は光消へ威薄らぎて、あはれ二等三等の下に位する國とはなり果てぬれど、其昔し盛なりし日は、或は海を蔽ふアルマダ艦隊を發して海王島の英國を襲ひ、或は米國大陸發見者を保護して領域を太西の西に擴め、文物燦然、國威四に嚇きしは、何人も知る所なり。今は此等も唯過去の歴史となり、アルハムブラの殘墟に昔しながらの月は冴へ、マドリッドの都に今も鬪牛の遊の絶へざるばかり、國は老ひて朽ちぬ。

國に興廢の別はあり、民に幾多の相違はあれど、西班牙はまた多くの事に於て、我國と相似たる所ありき。其人の容貌さへ、其髪髯の色さへ、其双眸さへ、往々取違へらるゝ迄に相似たるのみか、其舊家門地の氣象に到りては、實に我舊社會の武士の氣象に酷似せるものありき。下の物語を讀む人は之れを知らむ。

暖かなる西班牙の夏の夜はまさに二更の頃に當れり。仰き見れば、紺碧の空に燦として光りかゞやく白銀の月、玉の星。俯し見る地には、白き月光、黒き樹影。滿園の柑子の花今を盛りに咲き滿ちて、得ならぬ香は遠く園の外に溢れぬ。

園内一樹の柑樹の下に寂として佇む人影あり。銃に倚り、劍を横へ、枯木の如く直立す。疑ひもなく是れ兵士。月は柑子の花の間に漏りて斜に其横顔を射たり。蒼き迄に白き面、墨よりも黒き髪。疑ひもなく是れ年少の兵士、年少美貌の若武者。

銃に仗りたる彼は天上の月を仰げり。彼は地上の影を瞰めり。遙かの下には鏡の如く照るものあり、是れ海。鏡の上に一點の火光あり、是れ船中の燈。園の一端には尨然たる黒影あり、是れ家。家の窓に輝やく火光、是れ燦たる燈光。吹奏の音起り、喧囂の響聞へ、歌唱の音も聞ふ、是れ此家に宴まさに闌なるならむ。

此處は是れ西班牙北方の一要港。時は是れ佛蘭西が西班牙を制服したる十八世紀の末十九世紀の始。此園は是れ西班牙貴族某の庭園にして、宴は某がまさに當港の要塞を戍れる佛の將士を饗應せる宴會なりとは知られたり。海上の船なる光りは、是れ佛の軍艦の點ぜるもの。此處に立てる若武者は、即ち佛軍の一員にして、已に宴を辭して此處に立番せるものなり。

夜は進みぬ。月はます／＼冴へ來れり。宴會の音も次第に低くまり行きぬ。港内の船燈の光りも薄らぎ行けり。月皎々、星爛々、密柑花の香りは樹下に立てる年少武士の戎衣を身重きまでに燻染せり。年少武士は銃に仗つて瞑目沈想す。

彼れ何事を思ふか。

青年は感情の時代なり、況んや月色花香の夜をや。彼は銃を杖げり、然れども彼の心は殺伐の上にあらざりき。彼は劍を帶びたり、然れども其心には他に帶ぶるものありき。暖かなる夜は彼の心を蕩かしぬ。氣も重ふなるばかりの花香は彼を醉はしめぬ。年少武士は戀を思へり。

彼が先きに宴席に列するや、妙齡の一美人は頻りに眼を彼にとゞめぬ。彼女は西班牙貴族の女にして、即ち

宴會の主人の令嬢なりき。彼女は其貴族の家に生れたる數多の男子兄弟の中に唯一輪咲き出でたる絶世の花なりき。父母は之を手中の珠と愛し、他人は之を高峯の花と眺めぬ。彼女は平生優情と氣象とを以て聞へたりき。彼女は未だ曾て男子に眼を注ぎしとなかりき。然るに此夕彼女は何の爲めに年少武士を頻りに打見しぞ。然り、彼女は實に人の注意を惹く迄に年少武士を打見たり。酒を薦め食を勸むる間々にも、彼女は彼武士を見るを禁じ得ざりき。打見る毎に一點の雲眉端にあつまり、愁色面に上るを禁じ得ざりき。年少武士は思へり、彼女吾を愛するなり、彼女吾を思ふと。彼は斯く思ひつゝ、自から其妄想の夢に醉ひぬ。

夜はやう／＼に深け行けり。港内の船燈も今はかすかなる光りを示せるのみ。宴會の騷ぎも何時か絶へて室の光りも暗ふなりぬ。月は樹影を移し、星は光りを加へ、夜はやうやく冷やかになり來れり。

忽焉背後に忍び寄る人の足音。

武士は愕然夢より醒めて、ヤット銃身取り直し、身構して物音せる方角を顧る。

足音は背後にあり。柑樹の枝押分けて月光の中に出で來るは白衣の人影なり。白衣の人は進み來りて兵士のほとり近く立てり。月影に透かし見れば、是れ一個絶世の美人、是れ武士が今迄も想ひ思ひし其人なりき。主將の命あらば笑つて敵の大砲の口にも立たむ佛蘭西武士も、思はぬ敵の不意撃に驚かされて、愕然として言もなく美人の面を見詰むるばかりなり。

白衣の美人はツト傍に寄り來りて聲を潛め、

時迫れば要事のみ申さむ。君知らずや妾が父と兄は國の耻辱を慨嘆し、如何にもして君等佛蘭西の將士を打拂はんと、當地の民を語らひ、今夜宴會にことよせて君等を油斷させ、一擧して君等の不意を襲ひ、戍營を燒き軍艦を奪はむ筈なるを。時は迫りぬ。妾

は父兄に背けども、唯々何知らぬ君がやみ〳〵係蹄にかゝらむことの悲しさに、隙を窺ひ急ぎ來りて右の次第を知せ參らす。早く此處を逃れ玉へ。夜討の時刻は早や迫れり。

聲より早く大勢の足音此方を差して來るけはい耳に轟きぬ。

白衣の美人は透かさず側道に忍び去りぬ。

禮言ふ間もあらず、足音は近づき來りぬ。柑樹を楯に月の光に透かし見れは、眞黒き人影一群。霜の如く白く冴ゆるは、劍か、銃か。佛蘭西武士は銃さし置きて、一散に海の方に走り下りぬ。

ドヤ〳〵と跡より慕ふ足音。鬢を掠めて飛ぶ三彈四彈。年少武士は虎口を逃れて、露地に味方の本陣の方に走りぬ。

シヤーマン將軍の逸事

シヤーマン將軍は、亞米利加南北戰爭に於て、北軍の勇將として、聲聞最も高き人なり。去八月發刊の「マツクリユール」雜誌に、將軍の逸事を載す。記者はバイエル井氏なり、氏は曾て南北戰爭の際俘虜となりて、リツビーの獄舍ニ繫かれしか、會々「シヤーマン將軍進軍歌」とて名高き歌を作りて將軍に識られ、免されて其部下に屬し、後遂に將軍と一生涯の親交を結ひし人なりと云ふ。今其逸事の一二を摘譯して讀者に示すとなしぬ。

○將軍は渾ての艱難、窮乏を兵卒と共に頒ちぬ。彼は野陣に在りて、恒に軍服の儘にて起臥したりき。余は思惟す、軍隊に於て、將校より兵卒に至る迄、誰人も彼の顏を知らさるものなく、又幾千の人か親しく彼と物語りしとを。……彼は外見に意を用ゆると、極めて少なく、己か服裝の如きは、殆んと無頓着なりき。

○『今日は必す闘ひあらん』朝陽未だ東天を染めざる早晨、彼の部下コロチルチーデンレイドは云ひぬ『如何にして御身はソヲ知るや同僚某は問へり『アー、御身は氣付かさる乎、將軍は今彼處に燈をともして潔らかなる襟を附けつゝあるに非らずや、而してコハ死を決したるの表徴なれば』○果然戰鬪は其日興りぬ。

○將軍は又南部に在る婦人幼童に對し頗る義侠にして彼等を保護すると至れり盡せり、余は今も尚ほ暸かに彼がカロリナスに於て進軍中、部下の一若年士官を軍列の外に引出して士官の劍を二つに折り、且つ其肩章を斷ちしとを記臆す。ソハ斯若年士官が己が部下の兵卒が姿に婦人の裝飾品を剝奪するを默過したるが爲めなりき。

○余は一度ベルンに於て將軍を見しとありき、彼は其時恰も滊車に乘込みて巴里に向はんとするの際なりしが、斯町に在りし亞米利加の少娘等は各々彼を見んとて集り來りぬ。彼等は何れも曾て將軍を見ざるものなく、僉等しく將軍の前に進みて彼に接吻する樣は、宛ら彼等が其母に爲すが如く見へき。

○バーンスの寫本一卷は恒に彼の机上に置かれぬ。ヂッケンの小説は必ず彼が一年に一度通讀する所なりき。彼は善良なる書籍の讀者として終始渝るとなかりき。余思惟す、彼は心よりボルンを譏りしとを。彼は又音樂を好みて、屢々オペラに行きぬ。軍歌は恒に彼を樂しましめき。

○彼は又云ふなるべし「余は新聞記者が眞を語るは殆んど能はざるとなりと思考す、若し斯國が社會主義、共產主義、惡魔等に投げ與へらるゝの日來らば、ソハ新聞紙の責めなるべし、余の一生涯の重なる困難は新聞紙との爭ひなりき、新聞紙は他に售るべき或る感覺に乏し、假令新聞紙が千百の人心を悲しましむるとも、コハ新聞紙に何の關係もなきことなり』と。

頭巾一つ

於千代田艦　國木田哲夫

吾が艦隊、黄海の最北にかゝりて、第二軍の上陸を護衛しつゝある時、たま〳〵千代田艦長内田正敏君の夫人より一個の荷物、良人のもとに到着したり。青木と稱する艦長ボーイ、艦長室にて艦長の目前に此の荷物をときぬ。吾傍に在りて之を見たり。防寒用の頭巾一個荷物のうちより出でぬ。已にして又た一個出でぬ。一個は夫人殊に艦長ボーイに贈られたる也。艦長ボーイ年の頃は十五六、常にまめ〳〵敷艦長に仕ゆ。吾れひそかに夫人の優しき心をくみて此の歌を作る。

吾が夫は
遠き波路を、　ゆきゝして、
勇者どもと、　もろともに、
勇者どもの、　かしらして、
御國のためと、　はげみます、
懷ふや遠き、　夫の身の上。
北の海
吹きすさぶなる、　潮風を、
如何にわが夫、　しのぎ給ふらむ
思へばいとゞ、　すきまもる
都の風も　　身にぞしむ。
いくさ人とは、　言いながら、
さぞや不自由に、　いますらん。
遠きうみ山、　へだつれば、
朝な夕なの　かしづきも
思ふにまかせぬ、　女子の身、
たのむは夫の　傍らに
はべると聞きし　童のみ
生くるも夫と　もろともに、

死するも同じ、　波のそこ、
哀れの童、　なつかしや。
夫思ふ
吾れさへあるに、　いかならむ、
童が母の、　心根は、
ともに女子の、　身にしあれば、
思ふこゝろの　變らめや。
妻の心の、　深ければ
母の心ぞ　いや深き。
此の頭巾、
夫に送らん　其のつてに、
童のためと、　今一つ、
同じ包みに、　封じたり。
たまを霰の、　艦のうへ。

霰をたまの、　北のうみ。
氷るしぶきの、　そのなかに、
夫も童も、　もろともに、
たゞ安かれと　祈るなり。

病卒感懷　　空花生

けふもはや　くれぬと覺ゆ、
山寺の　かねのね悲し、
かなしさも
　みくにのためと　思ふ身は、
　　ねぐらにかへる　鳥をうらまじ。
よはいたく　ふけぬと覺ゆ、
月さへて　むしのね悲し、
かなしさも

君のみためと　思ふ身は
露ふきちらす　颪をいとはじ。
よはもはや　あけぬと覺ゆ、
秋風にラッパのね悲し、
かなしさも
人のためにと　思ふ身は
志ばしまどろむ　夢をしまじ。

家　政

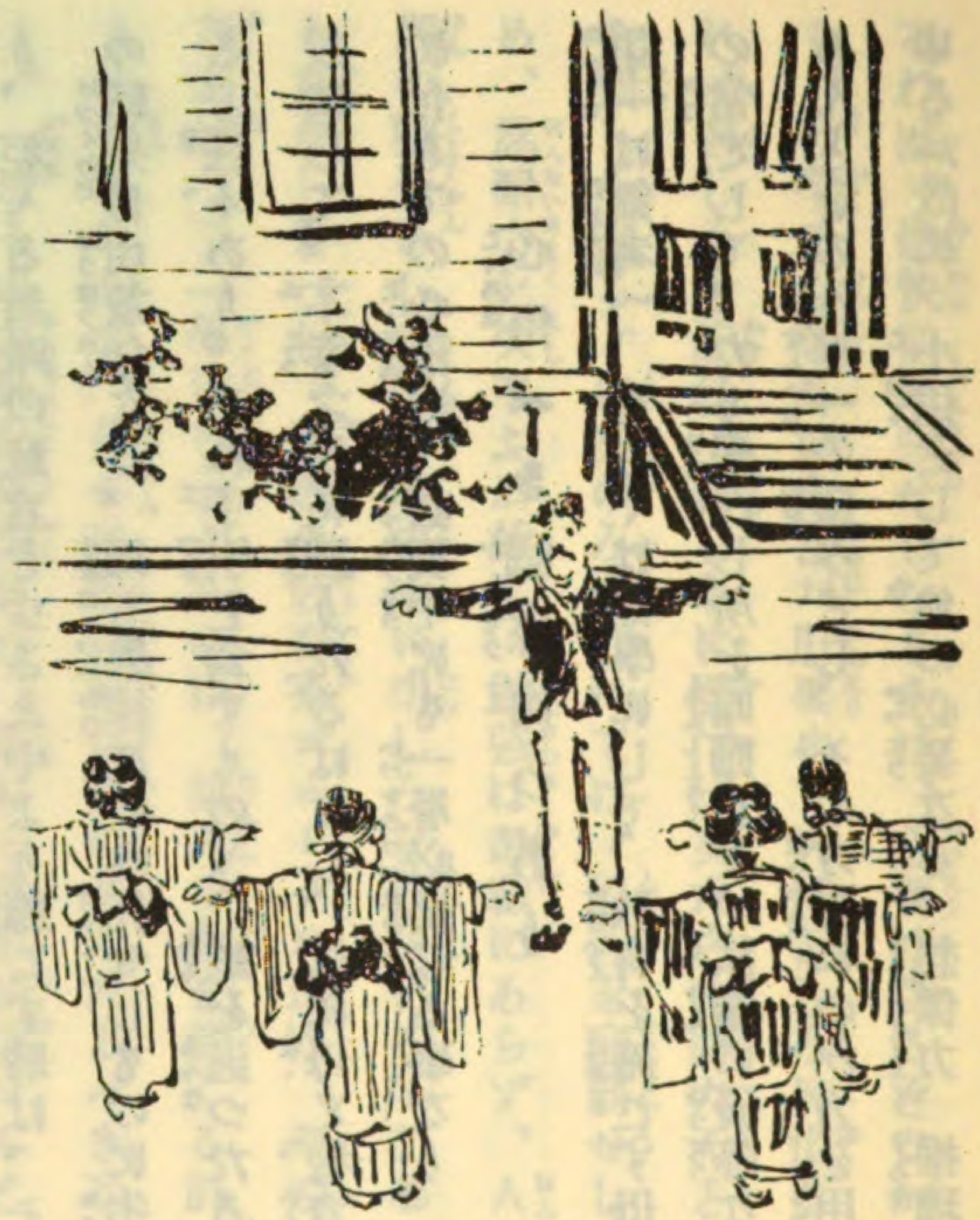
家庭の教育

女子と躰育

文明と女子の健康とは殆ど反對の結果を顯らわし、一の進むに隨たがひ、他の退くを見ると、男子よりも甚だしきは、女子躰育の行き屆かざるが故なり。試ろみに十人の婦人を集つめ、醫師をして一々之を診察せしめよ、彼等の中、少なく共、五人は胃病、腦病、婦人病、貧血病のため、已に半ばは眞の病人なるもの、殘るは筋肉薄弱なるか、神系衰疲して一人前の人と云ふを得ざるもの、眞の健康なるは、十中一人、もしくは二人に過ぎざるべし。これは少しく長ぜし婦人が、運動若しくは躰操等を爲すは、おてんばに至るの恐れあるが故に、父母も之を喜ばず、己れも他人の評を受けんとを恐れて、知らず〳〵之を怠たるによるなるべし。よし世話しくして、一日中汲々と事務を爲し、寸暇なきものにせよ、運動が食物と等しき必要あるとを思もはゞ、如何にしてか寸暇を得ざるとかある、求むれば必ず道あり、道なきは求めざるが故なり。小女に躰育の必要は云ふ迄もなけれども、長じたるものも亦た忽がせにすべからざるは此の問題なり。

如何に睡眠に時間を定め、食物に滋養物を撰ぶとも運動を欠ぐと、我國今日の女子の如くにしては、到底健

全なる母として、小兒養育の苦勞に堪へ得るものは得難かるべし。今日躰育の必要中忘するべからざるは、殊に女子の躰育にてある也。



散歩運動を試むる時にも、注意は躰の凡てを運動せしむるにあり。學校にて躰操を習ひしものは、躰操がその支肢平均に運動するの法方を用ゆるを知ると雖も、之れを知らざるものは、只だ道を歩むのみを以て運動と思ふことあり。たとへ長途を歩みたりとも、躰を屈がめ手を胸にして歩みては、その功半を減ずべし。必ずしも遠方に行かずとも、人家稀なる所や、自宅の庭等にて、手を振るも可なり。胸を張るも可なり、躰の屈伸を試むるも可なり、成るべき的け躰の凡ての部分を動かしむるを勉むべし。

母と智育の心得

世に二た色の母あり。一人は學校を以て完全なる智育を施こす所の如くに思ひて、家に歸りては更らに智育には考を及ぼさず、全く無頓着なるものなり。他の一人は、如何にかして、己が小供は、學校にては、他に勝り、社會に出でゝは一廉の人物となさんと心配の餘り、八釜しく勉强〳〵と云ひて、智育一方に凡ての心を費やすものあり。然れども、餘り過度の勉强は、心意の生長を害し、秩序定らざる學問は反て心意を暗

らくし、不完全なる教育は智力を亂だし、速成をのみ心がけて、急激なる勉強を爲さしむる時は、心意を疲勞し、遂に一生廻復の出來ざる衰弱を來らしむことあり、かゝる無暗の教育を少さき中より施こす時は、その結果自由放任なる、即ち學校にのみ托せしものに劣ると往々あり。これ手引を爲すものゝ、道を過つたる故にして、不幸之れに勝りたるはなし、故に母と智育に付きての心得は、必要中にも一層必要なる事なり。

心得べき個條四つあり

第一は無考へ、もしくは無學にして、教育を施こす母の常として、たゞ學びし所を暗誦して、試驗に優等ならんとをのみ專一の望みとし、その方向にのみ力を用ゆるが故に、小供をして他の必要なる、想像力、推理力等を發育して、完全なる發達を爲さしむるとを勉めず、遂に跛足なる人間と爲さしむるとあり。之れは第一に心得べき事なり。

第二は過重なる勉強を與ゆるにあり。未だ柔らかき、弱わき腦が、消化の力をも顧みず、學校より歸れば、算術の先生へ通わしめ、算術より歸れば、漢學を強ひ、續づきて晝間のさらへを爲さしめ、殆ど一升入りの器に、二升の物をつめ込むが如き殘酷なる教育を爲すものあり。かゝる小供の得る所は、病氣の外、何の利益も得ず、直接か、間接か、遠きか近きか、必ず不幸なる結果を見るべし。故に過重なる學問は、恐れて之を避くべきものとす。

第三は快樂と苦勞を程能く與ふるにあり。古しの學者は、專ら己が身體を苦るしめ、己れの慾を全き敵と見做して勉強せしが、その反對は、只だ學問を愉快に爲さしむるを勉むると、一時の流行となれり。學修を小供の好まざるには原因あり。即ちその教授の法方の宜しからざるか、小兒の受くる所の學術未だその兒のために早や過ぐるか、さもあらざれば小兒が未だそ

の學業に慣れざるに由るものなれば、成り得べき的け快樂の中に學修せしむることを得ば、即ちその小供が容易に學びし所を消化して、知識の心に入れ得るの證據なれば、愉快に勉强せしむることは、必要はさることながら、苦學の必要も亦た甚だ肝要也。人は苦しみに慣るれば苦しみを忘れ、苦しみに勝てば又た之に勝たんことを樂しみ來る、快樂のみに習れては、思想を衰弱せしめ、忍耐力を失なふが故に、勉强は遊戯にあらず、人間の職分として苦しみの中に樂しみを發明する所なるを感ぜしむべし。米國の敎育家ブルークス氏は、その理を述べて『學生と云ふものは、他人の物を受くる計りの物にあらず、熱心なる自動自奮のものたるべきなり。一度その力量を試驗せば、重ねて之を試驗せんと思ひ、一度難き事に出遇ふ時は、又た他の難事にも克たんことを希がふの心を發せしめ、學生をして其學ぶ所に興味を感ぜしむべし。好奇心を惹き起さしむべし、研究心を活潑ならしむべし。自信力を增高せしむべし。暗示諷敎によりて學生を誘導し、以てその力を養ひ其の熟練を進めしむべし』と云へり。こは敎師に向つて學生の敎育法を說きしものなれども、敎師としての母は、又た心得べき大切の事なりと云ふべし。

第四最後に今一つの事あり、之は等しき母より出し兄弟なりとて、各々その智力は等しからず、兄と弟とは嗜好も異なり、意志も異なり、性質も異なり、自然の構造も異り、凡て全一にあらざるが故に、各々の特性に隨ひ、その長所を發揮せしめんことを勉むるを肝要とす。學校は多くの小供を一時に敎ゆるが故に、各々の特性を別々に發揮せしむることは、勉め難ければ、之に注意するは家庭の敎育の敎師たる母の大任あるを知るべき也。

學藝片々

石鹼の談

家婦と石鹼は殆ど離る能はざる深かき關係を持てり。その石鹼は如何にして始まりしか？石鹼の無き以前には何を用ひしか？誰れが石鹼を發明せしかを研究するは、面白き談しならずや。こは歷史家の答ふべき問題なれども、古今の歷史を尋ぬるに、未だ我等の目に觸るゝ所にては、石鹼の發明に付きて、詳しき談しの記るされしを見ず。たゞ奇態なるはポンペイ府也。彼のビスビヤス山の燒け石のために、封じ込まれしポンペイの、古き都の博物館に下だりて、種々と調ぶるに、パンや、葡萄酒や、驕奢のために用ゆる裝飾品や、家具や、婦人の化粧道具は、一々有のまゝなるを見れども、一の石鹼を見出さず、ローマ、グリーキ、エヂプト時代にて、一も之を見ず。之れより以前は、調ぶるもよしなしと思ひ止まりたれども、石鹼は近世の發明なるとは、殆ど信ずるを得べし。

然れば、昔しの人々は何を用ひしやと問ふに、ローマ時代の頃より流行せしは、漂土とて、粘土の一種なり。それとても、今日我等が清潔の必要を云ふ如く、清潔を云ふもの一人もなく、又た之を感ずるものもなければ、今日より見る時は、實に不潔極まりたる人々なりし事を、歷史中に見出だすべし。言餘りに酷なるに似たれども、歷史に出るに、彼等は上も下も甚だ不潔なる人となりき。只だ上等社會は贅澤にして不潔なると、下々のものは儉約にて不潔の差あるのみ。即ちローマの貴族と呼ばるゝ上等社會の宴會の有樣は、之を示めすに最も適當ならん。貴族の大宴會始まりたりと云へば、我等の想像に浮ぶものは、第一美事なる椅子、卓子に花等の飾りたる現場なるべし。されど歷史の云ふ所に由れば、彼等は今日の家が食物を食する如く、床

間に臥して食事を爲し、多く食するを目的となして、食物の滋養等に付きて更らに考へざるが故に、滿腹の上にも倘ほ食し、甚だしきは咽を擽りて胃中の幾分を吐し、更らに食すべき餘地を作りて又た飮食を始じめたりと云へり。かゝる有樣なるが故に、風呂等に入る事も、衛生、養生等のわかりて入るにあらず、身躰油じみて困るに至り、始じめて入浴するが故に、實は家具の中、入浴用として定まりたる道具さへなき有樣なりき。さればその土塊を用ゆるさへも眞の流行として且つ清潔を保もつにあらざりき。その目的を知りて漸やく廣く用ゆるに至りしは、英國ありて以來の事なり。其後發明して實用せしは灰より取りし濁滓也。あくは今日にても、衣物の洗濯には屢々用ゆるが、凡てあくは多量のソーダを含くむが故に、洗濯用としては最も適當也。

ある人の說に、石鹼の始じめは、或る海邊の漁婦が、海藻を焚きし灰のあくの中に、過つて油を落とせしに、柔らかき石鹼を得てければ、試みに之を用ひしに、あくの如く强く皮膚を刺激せずして、至極具合が好かりしより、一般の使用に供するに至りしと云ふ。さもあらんかと思わる。たゞその頃の石鹼製造者は、灰より苛性ソーダを取るとを知らざるが故に、今日の如き石鹼は製り得ざりしならん。そは灰の中には、多量の炭酸を含むが故に、之を除そきて始めて善良なる石鹼を製るを得べし。兎も角も石鹼は、世界の文明と共に、日一日に製造高を增すは事實なるが故に、若し石鹼に付きて、精細なる統計を作らば、世界の文明と、石鹼に付きて、面白き關係を見るを得べけん。

冬の注意かず〳〵

火傷の看護

冬は來たれり、火の過ちは年々同じ法方を以て起るとながら、又も忘れて過を再びするは恐かしき事なり、咋年起りし出來事を記憶して、再び之を操り返さゞるこそ肝要なれ。

顧みればはや一年になりけるが、横濱山手に豐けく住らせる一軒ありき。今年生き居れば五才になれる女子を持てり。その子生れ付きての美人にして、父母の寵愛は元よりの事、近所近邊の小供を持てる親等は、何れもその父母をうらやまぬはなく、行く末を樂しみて育てけり。然るに或る日の事なりき。父母は散歩にとて夕刻家を出でたるが、留守に大變なる出來事こそ起りたれ。その家の習しとして、火の事には平生八釜しく注意して、坐敷のストーブ等には、すつかり網を張り居たるに、生憎や、その日に限ぎりて、網は忘れてかけあらざりき。家には見守も女中も居りしが、夕刻の事とて、何れも世話しく夢中となりて立ち働けり。

暫らくして坐敷の方にて、常ならぬ叫び聲聞こゆ。驚きて走り見るに、室は烟に卷かれて定たかにも見へわかねども、ストーブの前にてもたゆるはたしかに大切なる女也。守は半ば狂氣となりて娘をいだき、燒きつゝある衣物を去らんとすれども、冬の事なれば、二枚三枚重ねたるが故に、中々手早に取り得べくもあらず、漸やくにして取り去りたる頃は、已に半身燒けたゞれ、あまつさへ衣物を去らんとあせりたるため、皮はむけて、見るかげもなき有樣となれり。



釣り臺は病院にかつがれたり、されど二日許りの後に花は未だ開かずして散り

去せけり。若し此の時守をして、看護の法を心得しめ、矢鱈に衣物を脱がしめんとして、娘を振り動かしめて、火勢をいよ〳〵強くし、加之燒けたゞれたる皮膚を磨りて、皮をむくが如く事なからしめしならんには、或は彼は助かりしものを、彼が之を心得ざりしは、娘のために不幸の元なりけり。元より小供ある家には、火の用心を爲すが第一にして、火の不注意より、炬燵に足を燒きし赤ん坊、火鉢に手を燒きし小供、若しくば先きの談の如く、前かけや、袖等に火のうつりて、遂に衣を燒くが如きことは、毎年指を屈して算へも盡きせぬ程あることなれども、萬一衣服に火の付たる時は、慌わてざるが肝要也。慌わてゝ風の吹く所に出るか、身を動かし廻るが如きことあらば、反て火勢を增すのみにして、何の助けともならず、又た慌わてゝ衣服を脫せんとする時は、燒けたる皮膚を烈しく破る手傳を爲すが如きものにして、反て恐ろしき結果を生ず。かる場合には、けつとにても、敷きものにても、若しくはふとんにても、何にても有り合ふ物を以て身体を包つみ、圖の如く床に轉ばして、火の通らざる中に壓へ消すべし。萬一自分に火の移りたる時も、同じく敷物の卷かれつゝ、床の上を轉ろびつゝ、助を求むべし。走り出づるが如き愚は、くれ〳〵も爲すべからず。さて火の消へたる後は成り得べき丈け燒けたる皮膚にさわらぬ樣注意しつゝ、燒けたる所を剪刀にて切り去り、そこより藥を付くべし。甚だしき火傷には、急に醫師を招くこそよけれども、醫師の遠きか、若しくは甚だしがらざるものには、石灰水と亞麻仁油とを等分にしたるものを、綿にひたして火傷面に付け置くか、亞鉛花粉を羽毛に付けて火傷面に散布し、その上より綿を覆ひて括り置くべし。傷さへなければ二三日若くは五四日は其儘にて打ち捨てをき、四五日も立て、水にて傷面を洗らひ古き粉を去り、新らしき藥と取り變ゆべ

し。粉を散布する前に、橄欖油を塗りをかば、新らしき粉と變ゆる時、古きものを容易に取り得べし。勿論甚だしき火傷に至りては、失神するとあり、衰弱甚だしきとありて、醫師の力に籍るにあらざれば、生命に關するに至る、食物は成るべく消化し易すき滋養物を與ふべし。

室内の空氣

幸ひに我國の家は、障子のすき間あり、紙面より洩るゝ空氣ありて、室内の空氣は全く炭酸瓦斯にて滿つるが如きは稀れなれども、兎角冬は寒むさを厭ふの餘り、狹き一室に、ランプと火鉢を置き、然かも少しの空隙の無からんことを勉むるが故に、肺のためには甚だ宜しからざる影響を來たすとあり。殊に眠る時、數人一室に立ちこもり、互ひに吐きたる呼吸を吸ひ合ひ、翌朝頭痛の原因を作るは、恐ろしき事なり。我國古來北枕を忌むの風あれども、こは誠に愚かしき云ひ傳へなり。枕は北にても南にても、成る丈け同室の者と呼吸の通ひ合わぬ樣なる方向に向くべし。精細なる衛生法より云へば、壁に向つて臥す時は、己れの口より出でし呼吸を壁の反射によりて、再び吸ひ返すが故に、成る丈け壁のなき方に向ふを可とす。そは兎も角もその心持ちこそ肝要なれ。

小供の鼻孔の掃除

夕刻南の耳をそばだてつゝ、市中を散歩せんに、最も耳にたつは小供の咳と、鼻をすゝる音なり、咳は咽喉より來るもあり、氣管より來るもあれども、その原因の多くは、鼻のつまりたるより、口にて呼吸するが故也、鼻の垢の溜りたるを、自分にて取らしめ置く時は、獅の如き平らたき鼻となりて、容貌を害するのみならず、口にて呼吸を爲すが故に、喉を傷ため、咳を生じ、之を捨て置く時は、氣管病にもなり、肺ともなるべし。たとへ肺病と迄はならずとも、肺のために惡しき

と明白也。鼻は水漉器械の如き仕掛となり、之れより呼吸を爲す時は、空氣の中の塵を漉し去り、且つ冷めたき空氣直接に咽喉に當らざるが故に、咽喉の焮衝する恐れを、免るゝあり。去れば小供を持つ母は、かゝる小さき事にも注意して小兒の鼻を掃除すると怠るべからず。



放蕩の末

やぎ生

放蕩の結果、鼻の障子を失ひてふが〳〵となり、禿頭となり、盲目となり、甚しきは骨がらみとなりて、命を終るもの世間に珍らしからず、これ皆自業自得とはいひながら、親よりうけたる大切なる身躰を不具となし終るは、歎ずべきの至りなり。余は家庭の誡めとして實事談を述へむ。

某所の資産ある家に一人の男子あり、不自由なく養はれしまゝ金錢を費すを何とも思はず、果ては悪所に通ひ、家に居ることは稀なりき。兩親其他緣者のものもこれを憂ひて、時々意見を加へしかども、露程もきくことなし、こゝに於て親族打寄相談し、彼れに嫁を迎へたらんには、身も落ちつくべし、遊蕩に耽ることも止むに至らんと、早速嫁を尋ね迎へとりしが、案ずる

ごとく謹直となり、子女四人もうけて、いと睦しく日を送りける。其後兩親は世を去り、彼れの長女は、はや十六の春を迎へたりしかば、嫁入仕度にとて、衣服小道具數多く買求め、來年は何れかへ緣付せんと喜び居りしに、夏になりて此長女不斗頭へ腫物を發し、初めの程は賣藥にて手當せしが、癒へずして病勢次第に烈しく、美しき黑髮も何時しか失せて、腫物頭部一面に擴がり、醫師も持あましけり。長女は毎日鏡に對ひ以前に變る面影となりしをいたく歎き悲しみ、涙の絶ゆる間とてはあらざりき。これを見る兩親の心中は如何に感ずるや。

醫師の言に依れば、彼れの長女は遺傳性梅毒にして、容易に快復しがたしと、實に恐るべきは梅毒なり、彼れを災せずして却て彼れの長女を苦む。これにつきても早く實行したきは廢娼にこそ。

手藝案内

押繪の細工

追々廿八年の正月にも近づき、一よに二よと可憐なる女兒等が羽子つく遊戯も今一月餘となりぬ。東京にては毎年十二月十五日深川八幡宮年の市にて押繪羽子板を賣出す、其流行形は毎年相異り（其年内に演ぜし名優の肖顔を取る）と雖も、大低俳優の肖顔を以て持切と爲す、譬へば團十郎の辨慶、宗康、景清、熊谷等の如き若しくは菊五郎の髮結新三、公曉等左團次の富樫、九橋等九藏の仁木、瀧口等若しくは福助、米藏等の女形を一人仕立にし或は二人揃三人揃にすれども、其の俗なること限なし、何故に花鳥風月の押繪を造らざるか市に賣るものは大低俳優の肖顔を以て占領せらる、俳優の顔には一種の意味あり、事甚だ微なりと雖も、かゝる物品を兒女に弄せしむるにおては、不知不識の

間に悪感化を兒女の上に及ぼすに至るべし、故に兒女の正月の遊戯に羽子板を與へんと欲さば、市にて買ひ求むるよりも家庭に於て製造すべし、家庭にて製作する以上は自分の好む所に任せていろ〳〵なる細工物を得らるべし、花鳥風月にても可ならずや、日清戰爭日本大勝利も可ならずや、歴史畫も可ならずや、名婦賢女の像も可ならずや、松崎大尉の奮鬪も可ならずや、喇叭卒も可ならずや、玄武門開門の勇卒も可ならずや、福島中佐單騎旅行も可ならずや、其他自ら好む所に從がひ手に任せて製造し得らるべし、押繪は必らずしも俳優の背顔のみに限らず、世の父母たるものは宜しく此邊に注意し、今日のものより品格宜しく少しは教育的の意を寓せしものを撰むべき事肝要なり。

さて如何にして押繪の細工を爲すべき、これより其案内を記さん。

此細工を爲すにも始め典型を要す、典型は厚紙(古帳面の皮)か西洋紙のボールの如き粗雜なるものにて宜し、其上に押畫の下畫(何にても己が好む所に任せても宜しけれども、餘り粗惡なるに於ては出來上りの上引立ず、少し繪心ある人に委賴すべし)を置き、其畫に從ひて篦にて緣線をつけ、其線痕に從ひて切り拔くを要す、切り拔く時は成るべく幾度も切り直し、彼是見合せたる上、能々其恰好を見計ひ、善惡を取捨すべし、取定めたる上は前後左右の紛れざるやう符號をつけ置くを要す、但し典型は押繪に綿をつめるものには如何なる色にても宜しけれども、綿を含ませざるものは布帛の色と同色にすべし、何となれば若し其儘布帛の色と異りたるものを用ゐる時は、布帛の糸目のスキより地紙の糸現はれ甚た不躰裁なればなり、(地紙を切るには小さき裁庖刀にても宜しけれども、押繪は直線なるよりも曲線に切り拔くを第一とするものなれば、通常の鋏にて充分なり。

押繪に綿（眞綿は用ゆべからず）をつむるには上等の小袖綿を形の大小に應じて掌上にて薄く延ばし、形に合せて縁を鋏にて裁ち去り、裏方へ曲げて米糊（糊は糊板にてこなしたる米糊を第一とす葛糊等は用ゆべからず）にて貼り附る、高く膨らさすべき部分は、又別に綿を容る、これを容るゝ法は指もて少しく之を撮みて重ね入るゝなり、成るべく少しの糊を篦にてつけ布帛を張りたる後は掌上に置きて押篦にて其上を能くおさへ、又兩手の親指と食指とにて縁を少しく押へ裏へ曲げ置きて乾すべし、又襞をつくる物は襞入篦にて布帛を極め込みて糊をつくるなり、出來上らば面を輕く燒鏝にて熨し皺のなきやう心すべし、殊に少しく注意を記せば、押繪の中に容るべき綿は成るべく表の布帛と同色なる色を用ゆべし、譬へば黄、紅等の布帛には矢張同色の染綿を用ゆるが宜し、左なき時は薄手の布帛には往々糸目より内容物の見透されて大に見惡きことあり、又特に注意すべきは布帛地によりて細工に手加減を爲すべき事なり、綸子、縮緬の如き薄手のものは左程細工の困難なるを感ぜずと雖も地厚き織物又は毛織、天鵞絨の地厚きものは少しく困難なり、博多織の如き若しくば金襴の如きものは、襞の折込みたる上に火鏝を當て又裏の糊へ布帛を附くる時其帛の端を少しく濕ほしてつけ、押篦にて能く押え、尚ほ火鏝にて其上を撫で置くべし、天鵞絨も大低同様なり、布帛地（毛織地）によりては糊のなじまぬものあれば、先づ火鏝にて平坦に熨し置き糊を少しく附けて能く押し置くべし、吳絽、羅紗の如き極めて糊附き惡しきものは、糊をつくるや直ちに其儘締竹を宛てゝ挾み乾はかすを要す、縮緬類は餘り強く引き張るは不可なり、若し此邊に注意を怠るに於ては、地透き渡りて不躰裁なるべし。

押繪の道具を擧ぐれば（第一）糊篦（竹製にても角製に

ても宜し）（第二）押篦（同上）（第三）糊板（歴飯を製するものなれば小形に清潔なるを撰ぶべし（第四）火鏝（先の尖りたる小形のもの）（第五）鋏（通常の花鋏と呉服鋏と各一挺を要す）（第六）串（薄き篦形のものと稍厚きものとを要す）（第七）締竹（手製にても出來合を買ひ取りても宜し）以上七品あれば事足るなり。

此手藝も始業の内は思はしからぬ事あるとも、能く勉強し、能く練熟するに於ては羽子板、守入、小函等其他種々なる美術品を製作するに至らば內職としても能き賃銀を得るに至るべし。

書生羽織の仕立

冷氣漸く加はりて書生羽織の時候となりぬ、さて書生羽織の仕立法は、通常の袷羽織と變らねども、唯異なる處は綿の入りしと丈の長き處なり、されども本年の流行は丈短く殆ど袷羽織と對丈（譬へば袷羽織が二尺五寸なれば書生羽織は同寸法か五分乃至一寸長きを最流行とす）にし綿も薄き方を好み、眞綿ならば五十錢量青梅綿ならば一包も容れなば充分なり。

其裁方は始め兩袖各三尺宛都合六尺を裁り去り、それより六尺二尺を襟とし（丈二尺六寸として）其殘餘を悉く身ごろとす、裏は引返しにして、胴及袖裏は更紗きヤラコか更紗眞岡か絞唐繻子を用ゆるは平民的なれども、緞子、甲斐絹等を用ゐば上等向なりと知るべし。（但し裏地は一丈二尺を要す）

表地は其人々の好々に任せて可なるべきも、今日の流行は絣第一等の位置に居る、譬へば上等品にては大島紬の如きもの（男子用）お召紋織の如きもの（女子用）平民的ならば綿琉球、久留米絣、二子絣等の中を用ゐなば男子用にも又女子用にも（久留米は少しく武骨なれども）仕立てゝも障なし、其流行の委細は別欄流行の欄を參照ありたし。

新　染　術（續）

黃色染方二法——黃色を染めんとならば矢張染品を明礬水に浸すこと少時にして之を取り出し、能く水氣を絞り去り温湯を以て洗ひ出し、又水氣を去り絹五百匁每に「ウヱルド」(藥舖にあり)二百匁の割合を以て煮汁(前號已に記載し置きたり)を造り染品を入れて浸すこと三十分時間にして一應之を取り出し、此汁中に明礬水三合七勺五抄を注ぎ入れ能く攪ぜ、再び染品を浸入すること十分時間にして又もや之を取り出し直樣水氣を絞り去りて陰乾にすべし、又別法には絹五百匁每に白石鹼の稀薄なる汁中に「アンノッタ」汁(其製法は發號に詳し)七合五勺を投して能く混合し、染めらるべき物品を浸入し置くこと五十分時間にして之を取り出し、清水を以て能く洗滌し、更に黃櫟皮六十匁を以て煎汁を製し、右の染品を浸すこと二十分許にして一應之を取り出し、鎔化錫(硝酸三百匁鹽酸二百匁を石燒の壺に入れ、華氏の寒暖計大抵二百度許の熱を與へ、錫を薄く削りて片々と爲し、其一撮を投じて壺内を鎔ふ時は、錫片忽ち溶解して其形を失するに至るべし、此時又もや一撮を投入すべし、斯の如く數十度に錫片を撮み入れ錫片凡三十七匁五分を鎔かすべし、かく爲したる後は暫時冷却して硝子罎に移し其口を密封して暗所に蓄へ一ヶ月を過ごして後使用に供すべし)七匁五分を以て右の煎汁の中に灑ぎ入れ、能く攪ぜ再び染品を浸すこと十分時にして取り出し、清水を以て能く洗滌し、能く水氣を絞り去り例の如く陰乾しにすべし。

深色紅染方——絹を深紅色に染めんには、其量八十匁每に桶に水を滿たし、其中に明礬六十匁を投入し、能く溶解して後染めらるべき物名を浸入し置くこと五分間にして取り出し懸竿にたゝみて暫時水氣を滴落せしめ、再び右の明礬水に浸染せしむること十二三時間許を費し(但し此時間內に兩度物品を引揚げ、浸し方を

變換するを要す）然る後銅鍋に清水を滿たし暫時沸騰せしめ「コチニール」三十四匁を投入し、又之を沸騰せしむる事十分時に至り、先づ明礬水に浸し置きたる物品を取り出し、更に清水に浸し、懸竿に打かけ、其水氣を滴落せしめて「コチニール」の沸騰を止む、然れども是は少しも熱氣を冷却することなく沸騰點に近き熱度を保存し、此熱汁中に染品を浸し置くこと半時間より短かるべからず、且つ一時間より長かるべからず、斯くして後鍋より染品を取り出し、清水を以て洗滌すること兩回にして清潔なる木綿に包み能く水氣を絞り去り暖室にて乾燥すべし。

社交一斑

流行の栞　書生羽織

春夢

給羽織の案内は前號に記載し置きたれば本號には書生羽織の流行を記さんと欲す。

男物には上等品は大島紬若くは琉球紬を第一等とし中等品ならば絹紬の絣、米琉球の絣の中を撰むべし、女子用にはお召紋織山繭織の變縞、縞八丈、米琉球の絣の中を撰むべし。

平民的に着用せんと欲せば昨年大に流行を極めし双子の綿琉球を着るもの多く見受けられども最早下火となるべし、之に代りて流行するものは本年の新機紡績糸の紺絣ならん、これは武骨にして野暮ならぬものなれば、柔衣もの〻上に羽織りても見事にして、若し男子が着物羽織とも此品を用ゐ、下に更紗縮緬の下着を襲ね紺足袋にても穿きなば、何處から見ても厭味のなき扮装にして、又ドコに出づるも恥づる所なし、久留米絣も面白く、縞物にては縞秩父縞の如き頗る流行の傾向あり、以上の

平民的物品の價格は一端一圓より一圓五十錢の間に購ひ得らるといふ。

書生羽織の裏地の流行品は如何、最上等品を用ゐんならば、緞子に過ぎたるものなし、羽織裏地丈に織りたる繻紗も可なり、併し通常は甲斐絹を用ゆるもの多し、併しながら平民的書生羽織には更紗形木綿か、左なくば紋綸子を用ゐば流行の旨に適す、一尺二錢内外より二錢五厘のものを用ゐなば丈夫にして洗張も能く利くといふ、裏地は一丈二尺を取らば充分なり。

扨書生羽織の丈は從來衣服と大差なき程に長丈なりしも本年の流行は大に趣を異にせり、袷羽織と同樣か若しくは五分長きを好み、最も長き所が袷羽織よりも一寸なり、綿も從來の如くブク／＼と膨らすを厭ひ、中心に容るべき綿は眞綿にて五十錢位も用ゐなば可なるべく、木綿ならば背椅一包（一包八錢より十錢）を入るれば澤山なり、併し書生羽織は單に防寒の具なれば流行の旨に逐ふも宜しとならば右の分量に係はらずどつちりと入れべし。

肩掛

第一等の流行は無地白茶、肉色、藍鼠等の淡色に同じ色の端模樣あるものなり、駱駝毛織は重くして日本服の上には不適當なる故か着用するものなし、無論男子の肩掛を蒙るが如きニヤケ姿なし。

八九歲より十三四歲の女兒には相變らず毛絲製の肩襟用ゐらるれども、手製又は日本製のものはブク／＼と見惡き所あるよりか、本年は舶來の薄手のもの流行すれども、防寒又は雨雪を避くるには却つて手製のものに及ばず、流行に係はらず、外觀に拘泥せざる人は、自宅にて編むは好からずや。

併し毛絲の色は海老色か、黑かを撰まば流行でもあり、穢目立たざる益あれども、淡色のものは流行の色合にして且美觀あり、其兒女の年齡に應して製作すべし。

「はこせこ」

今時の若き婦人は「はこせこ」といふ名は其品物と共に知らざる人多かるべし、「はこせこ」は維新前各藩の大名小名の奥御殿に奉行せる女中等が外出の折など懷中をふくらす婦人の附屬品にして、今日の紙入なれども、其形大なれども（竪三四寸橫五六寸）實用とならず僅に鼻紙を挿むに止み、瓔珞附ける平打の簪（但し耳掻なし）を添ゐて飾りて御殿女中の持物中の重なるものなりしが維新以來全く廢れたり。

然るに此頃流行社會が復古の傾向となりしより平打の簪と共に復活した

り、然しながら其形は維新前のものに比し五分の一位に縮め（布帛地は錦類其形は挿圖の如し）勿論鼻紙を入るゝ用なれども、懷中鏡、紅筆などを添へ、平打の釵（矢張り耳搔なし）を片側に挿み成程優美なるものに相違なければ、日下貴顯の兒孃の間に行はれ且つ婦人風情に至りてもヤザと野暮がりて此般の流行品を携帶するに至りしといふ、流行は益々古代に傾きぬ。



はこせこ

千鳥打（根掛）

現今の流行社會は日清戰爭の影響を受け、日清戰爭に關係ある俗に際物といふもの耳にて流行品として世に紹介すべきもの尠き折柄、千鳥打といふ根掛出でたり、これは日清戰爭には少しも關係なく頗る優美の品なれば萬綠叢中紅一點の感あり、第一に賞めて遣るべきは紐の打の奇なると房の美なるとにあり、心入り丸打なる所は從來の品と變られども二條打なる所最も妙なり、島田などにかけるもの近來非々見受けらる、色は淡紅色又は藤色又は白色に占めらるゝが如し、其道のものに尋ぬれば價は二十錢内外なりとぞ。

京都の流行衣

東京と西京とは幾山幾河を隔つれば古來より各其趣味の異なれるを免かれず、近來交通自在となりたれば東京の感化を彼地に及ぼすこと尠きにあらねど、彼地亦固有の趣味あり、此頃同地の新聞に『京都の流行衣裳』と題して掲載しあり、茲に其儘轉載して讀者諸卿の參考に資せんと欲す、但し東京と西京の各趣味の善惡比較は後號に報せんことを期す。

此頃京都の吳服店織屋等へ注文ある春着の衣裳さまざまあれど中に就て流行ものとして最も注文多きは男もの羽織は黑羽二重五ッ紋裏白繻珍又は染模様にして﨟纈寫し紐白丸打ち（代拾五圓位）着物は黑羽二重五ッ紋裏納戶羽二重、縞物は斜子織黑地薄茶縞（代拾七圓位）下着は二枚襲紋付又は茶無垢に限る又は白無垢もよし縞物は神代又は太子遠山等の唐棧裏上着に同じ（代三拾八圓位）胴着は羽二重古代更紗模様（代拾四圓位）襦袢は胴白地無地、袖金剛織御召有職色（代七圓位）帶は繻珍織に古代形の出色（代八圓位）袴は兩面織單にして表茶縞又は藍縞等裏花色の織分け（代拾七圓位）◎婦人物被布黑紋羽二重又は紋綸子尤も紐同色裏繻珍若きものは紅緞子羽織なれば五ッ紋（代拾四圓内外）着物は紋御召又は花紋織にして黑地又は薄色

地三枚襲、同柄にして中着下着二枚は色違ひ裏納戸色又は薄色の縮緬に限る但し中着下着は胴抜き(代三拾七圓位)帶は幽水織にして古代模様、地色は木紫花色等なり(代三拾圓位)長襦袢は薄鼠色にして若きものは緋縮緬の無地(代拾圓位内外)帶揚げは羽二重疋田絞り(代二圓五拾錢位)襟は薄色縮緬相良縫(代壹圓五拾錢位)

以上男女共何れも上等向にして一段下つては着物は男女共大島紬の小絣又は京都絲織格子縞の花色黒地又は縦横縞等下着は唐東織名物裂縞又は絲織色替り格子等なり帶は男は博多同色共紋織、女は博多織にして黒地又は花色薄茶等にして總格子縞片無地なり又履物は男は南部締め表の神戸形に薄色の鹿の緒女は後丸又は都柾形にびろうどの鼻緒表は男と同し

讀者試みに其趣味をあぢはひ玉へや。

花瓶の花



此頃花瓶の花が精好に製し得らるゝや、殆ど造化の妙を奪ふかと疑ふものあり、床の間に活けある菊や、小菊や、松の緑や、山吹の黃や、菖蒲の色や一見熟見其人工に係るやを疑ふに至る、幾月を經るも凋落の患なく、又水を與ふるの面倒なく、イツも座敷の床の間に今を盛の花を眺むる家庭多し。

本年の花壇菊

本年は日清戰爭起り又は其他の事情の爲めに聊か之を憚り花壇菊を培養せる家幾分か減したれども培養の結果は昨年に劣らず、流々にも依るべれども本年は甁挿の仕立多く篠立は少數なりしが如し、花の色も種々變りたるものも顯はれ決して黃菊白菊の嘆なし、今余が其道の爲に國民新聞紙上に於て批評したる都下有名の花壇菊の評判錄を左に掲ぐべし。

今や實に觀菊の好時節なり花もそろ〱狂ひ始め昨今より愈々佳境に入りたればこれより聊か其評判を記さん、麻布の大關さも呼ばるゝ西町の今井氏邸は本年も二花壇を設け別に甕挿造一花壇、實生一個所あり、總評より言へば昨年故乘角翁の作と變らず、花によりては昨年より一層見榮あるもの尠からず、最も佳作と思はるゝは前列の一番にある『大波芙蓉』なり此花は毎年屈指のものなるが本年は花の大きさと言ひ色合(白に淡紅を引きたるものなり)といひ、葉の色と言ひ幹といひ間然する所なし『落霞孤鶩』(黃)の狂ひ面白く『六玉川』(黃)の色は眼を覺すばか

りなり、『今井招鶴』は新花なれども其趣妙なり其他『今井雪朝』（白）『今井秋菜』（外黄内赤）『今井一燈』（赤）等孰れも一二流の間にあり『今井篝火』は未だ充分の見頃に至らず『今井小夜怨』と他の二三株は葉に申分あり又屋根を除り圍ゐ過ぎたる爲か花壇の内何となく晴やかならざるは惜むべし、但し丈は昨年より三四寸も足ざるがこれは土用中の旱の爲め幹の成長充分ならざりしに依ると聞けり更に今井家と兩關の位置にある市兵衛町溝口伯爵邸の菊花を評せば本年は旱天の爲め栽培を害せられ且つ日清戰爭を憚られて衆人の縱觀を謝絶しあれども其栽培の結果は昨年に優ることあるも劣るべからず、且つ新花多きと葉色の美なるは今井家に一頭をぬきんづるが如し、今左に重なる各花を擧ぐれば『晩秋の空』の如きは葉花共に佳にして『猫野』は昨今狂ひ最 中『迦陵頻加』は花やかにして素人の好く花なり、『紅葉駁』の色愛すべく狂ひ中々面白し、『入日の灘』は少々晩花なれども甚だ多望なり、『稻葉の秋』は妙に狂ひ始め『深谷の楓』は其名に負かず色甚だ佳麗『夕陽紅』は『入日の灘』と共色質同じけれども少しく濃色『處女の袖』は昨年よりも佳作なり、其他志賀の都、十二一重、山吹花、古金の色等見るべきもの尠からず、又別花壇に獻納花を植ゐたるを擧ぐれば黃葉村（黃紅絞）老虎黃（黃樺）深夜の燈（紅）東都の花（淡桃）西湖の月（黃樺）井出の玉川（水黃）井出の里（黃）花盛（淡桃）廬山秋（紅樺）月の都（白）孰れも鉢菊なり、昨年より栽培し始めし麻布本村町百六十五番地有村氏宅は本年も相應に出來したり中に『猩々亂髮』の如きは第一等の位置を占め其狀恰も猩々髮を亂したるが如し『八重山吹』の黃も面白く其他『黃金山』『稻妻』『石山の月』『金閣寺』等は上作なり、北品川坪井氏の花壇は古より其道に老練なるだけ栽培も亦一種の趣あり、花壇晴やかにして菊も亦風韻高し、本花壇の花の佳作なるものを擧くれば『鹿の一聲』の如きは花葉共に一點の申分なく善美の作なり、『樂園の秋』『大樹後庭花』『深谷の楓』『一葉の秋』等は其の重なるものなり、控花壇には『晴天の鶴』『波上の月』等の名花あり、此方面に昨年迄二本榎上行寺の菊ありたれども本年はなき代り、白金大崎村（目黑停車場前）に花房邸あり昨年よりの栽培なるが割合に能く出來せり篠立二花壇の外に一本立の系菊あり同邸は園內廣濶にして一面蔬菜菓物の類を植ゐ、室造りの葡萄や、茄子、胡瓜を見るも面白し、

日用品物價

◎白米（一圓に付）　一等白米六升六合●二等白米六升六合●三等白米七升二合●四等白米七升六合●五等白米八升

◎雜穀　本貫大麥二斗一升五合●脇塲大麥二斗一升五合●肥後上小麥一斗八升七合●同麥安一斗八升●船橋小麥一斗八升五合●常州小麥一斗九

升五合●下總小麥一斗九升三合●札入竹林麥一斗三升●野搗粟一斗三升五合

◎鹽　赤穗三俵六分五厘●大鹽幷に八家三俵七分五厘●本齊四俵七分●新齊五俵一分

◎砂糖　稀車卅二匁六分方次廿八匁●台安十七匁五分十七匁次十六匁五分●無類黑十七匁●新製初昇卅二匁●天光卅一匁三分●古初昇廿九匁

◎種油　地水九圓十錢●桐八圓五十五錢●胡麻十一圓五十錢●荏油十四圓二十錢●入山十圓也久ト九圓八十三錢●星印九圓九十三錢●井桁九圓八十五錢●イ印九圓八十錢●坂水九圓九十五錢●一川九圓八十五錢●チヤスタ一圓七十五錢●タンク一圓七十三錢●ホーキ一圓七十五錢

雜録

最近社會思想一斑

◎國難と婦人（婦人矯風雜誌第十三號社説）

報國の志あつて其方法を知らざる婦人あるべしとて、婦人が如何にして國難に赴くべき乎を切論せり、

第一『婦人の事業は教育家の如し』教育家が人心の動搖に際しても其職を擲つべからざる如く、婦人も亦內に在りて國に盡すを忘るべからず、日清戰爭に於ける日本の連戰連勝は義戰なるが故なりと言ふ者あれども古來義戰にして敗れたる例も多し、日本は文明の利器に富むが故に勝つと言ふ者あれども、支那とても文明の利器を有すると我に讓らず、重なる理由は、獨逸が佛蘭西に勝ちたると同じ、ビスマークは幕中に聖書を開きて祈禱しつゝありき、ナポレオン三世は幕中に小説を讀みつゝありき、との逸話は、此二人の比較とのみ思ふべからず、獨逸國民の重厚と佛蘭西國民の輕浮を形容したる也、今日の日清戰爭に於ても、我國民の品格、先づ支那國民の品格に勝ちたるによりて勝ちし也、而して此の國民の品格を進むると云ふと、是れ婦人が自ら任じて爲すべき事にあらずや。

第二『戰後の社會的現象に關して』婦人の責任を論じて曰く、

多數の兵士は必らず無事に歸朝したるを以て、命拾ひにても爲したるが如く、凡べての規律を忘れ、嚢中の煖かなるに任せ、酒飮むべし、婦人戲るべしと爲して、隊を爲して市中を横行せん。從軍人夫の如きは、兵士よりも規律の從ふべきなく、而して其の得る所の賃錢は、兵士に比して、多きがため、酒色に耽るの一點に於ては、更らに甚しく、而して自から一國の大事にても爲したるが如く、一廉の官吏にても爲りたるが如く思ふもの多きより、其横暴中々に當るべからずして、遂には白晝良家の兒女に戲るゝが如き珍事あらん。兵士、人夫の處爲此の如くなると共に、市中には不正業者と不正婦人とは、時を得顏に跋扈せん。これ吾人の臆測にあらず。明治十年の戰爭の結果によりて、略ぼ推測すべく、また海外列國の戰後の現象に照らしても推し得べきこと也。故に婦人は今より決して矯風事業を輕々しく看過すべからず。看護婦の白服をつくるの志ある大臣高官の夫人令孃は、決して矯風問題を看過せざるべきを信ず。否な之を看過するは、愛國心の厚きを示めす所以にあらざる也。

第三『婦人は一國の經濟を助けざるべからず』日清事件以來、海軍は已に一千五百七十萬四千四百六十圓を費し、陸軍は四千四百二十九萬二千四百十七圓を費せり、而して政府は過日五千萬圓の公債の中、三千萬圓を募集したる外、更に一億七千萬圓の公債を募集せんとす、之を返却するは、到底吾人國民の責任なれば、我國民が年々飮酒に費す所の六千八百萬圓、此外國民の不節制、不克己より生ずる巨額の冗費を嚴に節減せしむるやう、矯風的運動を要す、

第四『目前の慘狀を救ふべし』愛知縣某村の或る後備卒が幼兒を殺して召集に應じたるが如き、其罪は責むべきも其志は憐むべし、是れ唯一の例にあらず、到る處に此の如きこと少なからず、彼の如くに罪を犯さずと雖も、遺族の饑餓凍餒は到る處に存す、多感なる婦人にして之を救はずんば誰か之を救はん。

◉社會に關する雜感（宗教第三十七號布川靜淵氏寄書）

第一、社會學者の目下至要の攻究問題

先づ日清交戰以來諸の學者が學術的眼孔を以て大に攻究すべき事實續出したるを說き其例を列擧して偖社會學者の攻究を要する問題は

（一）日清戰爭に於ける彼我の擧動によりて道德的觀

念を研究すると
（二）此戰爭によりて朝鮮人民に及ぼす影響
（三）此戰爭の歐米諸國に及ぼせる影響
等なりとて例を引き證を擧げて詳論し未だ完結せず。其彼我の擧動によりて道德的觀念を研究すべきとを論ずる中に曰く、

見よ。平壤の役、幾百の我兵は銃丸に貫かれ、頭を刎られ、腹を切り取られ、兵士の肌に付けたる名識標を奪はれたり。之れ清人は啻に我皇國の敵に止まらず、人類の敵たるとを表するもの、苟も人類として忍ばさるの所爲にあらすや。唯之れのみにあらず、朝鮮江東縣に於て、清の斥候が不法にも妙齡の婦女子を捕へ、其の既婚者たると處女たるとを問はず、獸慾を逞ふして恥ちず、之を拒む父兄を虐殺し、剩へ財寶を掠奪して狼藉を極めたる如き、何ぞ其の清軍に規律なく、兵士の暴横なる、且つは道德の低度なるの甚だしきや。天津領事が歸朝の際、敢て戰鬪に無關係なる、童幼婦女を虐遇したる如き、上海其の他に於て公私の差別を辨せず、我か在留の商民を虐遇したる如き、支那の漫遊探撿家、石川伍一氏を、大國の總督たる李鴻章が、之を殺戮し二日間の梟首を爲したる如き、我が軍に生擒されたる俘虜の、洒然として己が一身を顧み敢て、國家の存亡に顧慮するなきの狀、一々枚擧に遑あらざる行爲は、社會學者に對して種々有益なる材料を供するなり。觀て我が皇國の擧動を觀よ。何れの事實や皇國の理想と權利の存在を表白せざるものはあらず。敵愾心の高潮に達するや、人、國あるを知りて、自己あるを覺えず。彼の赤十字病院の仁慈、歐洲自稱文明人をして喫驚せしめたるのみにあらず、大元帥陛下の廣島に出御せられたる、捕虜の待遇に於ける、我が兵の規律嚴然たる、行事の義烈、手段の正當皆な之れ、博愛と文明の主義及び目的に、恰當するものにあらずや。

是等の事實を總合して、國民道德の理想如何と、社會進化史上、日清の道德の相異なる所以を究むべきなり。

◉戰亂と農工商の關係に就て前田正名氏の檄

（農事新報第七十三號）

其要旨に曰く、今や日清戰爭の慘狀は人の感を惹くと切にして大なり、而も翻つて商戰場裡を看れば轉た急務の邦人に迫るにも關らず甚だ冷然たり、正名甞きに北陸、關西、九州、四國を巡回したるが、到る處の實業者手を束ねて戰爭を傍觀しつゝあるのみにて大に正名を失望せしめたり、正名は二十年前より夙に平時の戰爭は農工商にあるとを說き而して身自らも戰場に臨むの覺悟を以て之れに任じたり、殊に近來の如きは病を養ふの暇を得ず、衰弱困憊死地に居て而して死地に在るを忘る、正名にして一步退かん乎、我率ゆる弱

卒は一時に潰散して復た容易に進むと能はざるべきを恐るればなり。

日本農工商業者に忠告す、諸子夫れ眼前の僥倖心を去り宜しく壯士が戰場に臨むよりも猶一倍の奮勵心を以て事に此に從ふべし、區々たる小利を睹せんが爲に、內地に齷齪とし又渡韓するが如きは畢竟其何の爲めたるやを知るに苦む、今日の戰爭は富の戰にして、金力なくんば最後の勝利は覺束なし、換言すれば勝利を占むるも金なり、戰ふべくして戰を止むるも金なり、畢竟國力の充實せるもの最後の勝利を博せん、我が實業家は戰亂より生ずる國家の前途に着眼するなくんばあるべからず。

商權の與奪此機一髮の間に存す、好機豈得易からんや、勇氣なき商工業者は事に臨んで踟躕逡巡何事も困難なりと云ふ、焉んぞ知らん勝利は其困難中にあるとを人若し困難に逢ふて之を打破するの勇なくんば東洋の商權は瞬間にして歐米人の掌中に歸せん、一難を經る每に勇氣百倍し來れとは當さに現時の實業家に忠告すべきの辭なり、即ち知る現時の事農商工業者の一致團結に在るを、商隊整ひ工軍進み農制立つ、一國の興隆期して待つべし。

◎義人の働（基督教新誌第五號、赤沛生）

其一節に曰く、

嗜好は利害より力ある事は吾人が常に實驗する所のものなり、多くの人は自己の利害に反する習慣に從て其意見を作り其位地に安す、之れ彼等が嗜好に從へばなり、人は現時の境遇を好み目前の習慣を好む、この好むてふ事は經濟家が常に稱する利害なる武器に反對する居にあらずや、何故に嗜好は利害を壓倒し習慣は法律よりも勢力を有するか、曰く嗜好は人を通して來り人との密接によりて擴張せらるればなり、之を以て貧と惡と罪の根底に橫れる習慣—嗜好は又他の習慣によりて善く變化し得らるなり、此故に清潔なる生活をなし、奢侈を去り自己の利益を得んが爲めに他の損害を來らしめず、自己の額に汗してパンを求め、惡人に對して正義を盡し、弱者に向ひて慈善を施し、然かも神の前にありて謙遜に生活する義人を要するや切なり、五十の義人なる團體が富めるも貧しきも各自の寛大と正直との實例を示し、他人と交際する際基督の如き行爲をなせば、此等義人に交る人々には舊來の惡習慣を除去るを得べきなり、

◉荊楚文學の妙趣（精美第三十七號、藤田孤月）

先づ楚の地は古の揚州荊州にして深山大澤多きことと草木禽獸に富めると、氣象の變化速なるとを記し、深山大澤は人をして敬畏の念を生ぜしめ、猛獸毒蛇は人をして恐怖の情を長ぜしめ、氣象の變化速なるは人をして靈異を感ぜしむ、故に其地淫祀多し、北方思想の實踐的なるに反して、超絕的なり理想的なり老子先づ虛無の說を唱て關尹之に和し、其言を祖述するもの紛々相承て起ると敍し、其地、文學の特異なる妙趣は散文家の莊周と韻文家の屈原を出したりと說き、二人が文學上の技能を品藻して曰く、

吾は莊叟を以て抽象的純理を表すに具躰的事物を以てするの技能に富めりと謂ふ、然るに單に具躰的事物を以てせばさて直ちにその文をして美的たらしむるに足らず、その事物の材を撰擇するに於て天才と不才と自ら判る、その材にして美感の琴線に觸るべきものならしめば妙趣自ら涌き讀者をして手の舞ひ足の踏むを知らさらしむ、莊叟は如何なるものを以てその材とはせし、彼は美文に於も似つかはしき捷地に於て古來盛に行はれたる神怪の說と、楚地に特に多き草木禽獸とを以てしたり、ここに於てその抽象的純理は具躰的事物を以て表れ、その具躰的事物はその文をして妙趣津々滴らしむ、

此く荊楚文學の通性とも見るべき、抽象的を化して具躰的となすに巧なる技能と、古來盛に行はれたる神怪の談なかり、花卉禽獸をとりて材となすに妙なる手腕とは、吾楚辭に於ても亦た之を見る、支那詩賦中太古の神話を提り來りて之を材とし、その所謂賦をして神話的詩賦たらしめしもの、屈原の如きはなく、また香草佳卉を拉し來りて材とせしこと屈原の如きもの亦た少なし、故にその賦の全躰、敍情詩なるにも拘らず、その一節敍事詩に類するものある、是れ抽象的を具躰的と化するの巧にあらずや、神話はその賦をして人を仙鄉に遊ばしめ香草佳卉はその賦をして人を芳塘に誘はしむ、之れを讀むものは屈原が忠肝義膽より迸出せる熱誠と怨嗟とに同情を催すと共に、時に仙鄉に遊び、時に野望を極むるの快あるなり、

四月

四月の奇なる性質とて、毎年英國グリンウ井ッチに於て觀測したる四月に於ける平均溫度につき、奇なる變化あることを一雜誌に記したり。即ち

年	平均溫度	五年平均溫度
1865	52°9	—
66	48.6	—
67	49.9	50.2
68	46.7	49.5
69	50.9	49.4
70	49.2	49.2
71	48.2	48.7
72	48.8	48.6
73	46.3	48.2
74	50.5	48.1
75	47.0	47.6
76	48.0	47.9
77	46.1	46.5
78	48.0	46.6
79	43.5	46.1
80	47.2	46.5
81	45.8	46.3
82	48.0	46.7
83	47.0	46.7
84	45.3	46.9
85	47.6	46.1
86	46.6	45.4
87	44.2	45.5
88	43.5	45.1
89	45.7	44.6
90	45.6	45.2
91	44.2	46.8
92	46.9	47.8
93	51.4	—
94	51.0	—

而して月々風雨等の如き不規則の原因に由り、温度を變ずるが故に、此等を成るべく除去する爲め、第三行の如く前後合せて五年を平均したるに、其平均温度によりて見れば千八百六十五年より同八十九年迄は次第に減じて四十四度六に至り、夫より又増加するを見る。此等は地方に關する者にあらずしてパリー、ジユネバ等の觀測に就ても亦同樣なりと。實に奇なる變化と謂はざるを得ず。

スパルトの少年教育

無一生

往古希臘の市府スパルトに於ては物に怖ぢ恐れざる習慣を養はんがため人氣なき淋しき處に唯一人にて居り亦闇黑の中を歩行する樣に夙に幼稚の小兒等を馴らせり亦彼等が食物に付いて撰嫌をなさずして彼等に給せらるゝ食物に滿足し乃至は濟まぬ顔をしたり叫喚いたり泣いたり怒つたりせぬ樣に、洗足にて歩行し硬き寢床に寢ね而して每度地上に臥し、寒氣や暑氣に堪得る樣に夏冬共に同じ衣類を着ける樣に彼等を馴らせり斯くて彼等の年齡七歲に達すれば熟練にして嚴しき敎師の監督の下に彼等を置けりスパルトの立法家は法律や司法官に服從する市民を得るの最も確實なる方法は幼稚の時より全然彼等の敎師に服從する樣に小兒等に敎ふるにあることを能く會得したりしかば彼等の敎育は具に從順と云へることを年季にて修得するにありしなり。

夫れより年齡稍々長じて年長の諸人と俱に食卓に就くことを許されし曉には「コノ室内に於て爲されたる談話は片言隻語も戸外に漏洩することを許さず」と言ひつゝ食室の入口の戸を指示されけるが這は是れ言語を愼む習慣を少年等の腦底に印する日課にてありしな

り。

ラセデモンヌの立法家なるリキユルグは右の如き强硬なると同時に精緻なる敎育の肝要なることを以て同鄕の諸人を説服するがために大に苦心せり。

リキユルグは彼等をして同感を表せしめんがために活ける假設話を用ひけるがコノ一種の新らしき寓意訓誡は眞面の議論より立勝りたる功果を奏せり。

リキユルグは同じ牡犬の種にして同じ牝犬の胎内に宿りし二疋の犬を飼育しけるが一疋は嚴しき躾方をなし他の一疋は自由に其爲すがまゝに放任し其食はんと欲せる食物は盡く之を與へけり一日人民の集會の面前に彼の二疋の犬を牽來らしめ同時に一杓子の肉汁を地上に置き而してマタ一疋の野兎を放ちけるが嚴しく躾されたる方の犬は夫れと見るより野兎ござんなれイデヤ功名手柄して主人の感賞に預らんと其跡を慕ふて發地に驅出し仲間の犬は好き食物に有付きたりと肉汁目掛けて飛出せり當下立法家は襟を正しく會衆に打向ひ「覽られよ諸君敎育の結果をコノ犬は二疋共同じ兩親の種なるが一方は貪食家にして一方は狩獵家なり這は是れ彼等に與へられたる日課と彼等が獲たる習慣の結果なり去れば御身等の小兒は余が御身等に薦むるところの法律を漫然看過すると遵守するとに由りて成人の後ち怯懦なる人ともなり亦勇氣ある人ともなるべし」とスパルト人等はリキユルグに聽きて彼等の小兒を養育しければスパルトは遂に希臘中の最も勢力ある市府とはなれり。

山嶺探撿の發達（一）

左に揭ぐる一篇は英國タブリユー、マルチン、コンウエー氏の起草にして古昔より今日に至る山嶺探撿の發達したる有樣を記したるものなり今其全文を譯

して讀者の瀏覽に供す　譯　者　識

地理的探撿とは人事に關する、地球表面の形象の尋究と記錄とを云ふなり。而して吾人が唯々其形象を知るを以て足れりとせず、進んで地球上何れの箇所をも自由に開通せしむるは、尙ほ重大なる要件なりとす。吾人が行き得る箇所と行き能はざる箇所とを問はず、斯等の箇所は、其界限を確定すべき、而して唯試驗に依て確定し得らるべき區域にして、斯地理的試驗を稱して旅行とは云ふなり、精看細察なる旅行家の地理學に於けるは、猶ほ周到緻密なる實驗家の他の科學に於けるが如きものにして、共に同一の精神を以て、彼等の問題を考覈し、其解說に務めざる可からず。

現時の狀態の下に於て、地球の表面は、今尙吾人の近接する能はざる幾多の箇所を有す。海に在りては、吾人をして深く海底に入らしむるの潛水器未だ發明せられず。山に在りては、未だ二萬三千尺以上の高處に達したる登山者あるを聞かず。又北極數度の內に近接したる者、南極に甚だ近く進みたる者も有らざるなり。舊き昔に於て、水の表面は全く吾人の步を容るゝ能はざるの時代ありき。海洋の邊端は、歷史以前の人類をして恒に「是れ極なり之より進む能はず」との語を呼ばしめたりき。然ども後世航海術の發明は、遂に吾人をして海路を開通せしめたり。四時共に皚々たる雪を以て埋めらるゝ區域は、近代に迨る迄(比較的に)、等しく吾人の行路を實際に杜絕したりき。素より世には、斯る未開の地域に侵入して、自からを危くし、若しくは其身命を亡失したる一二異例なる大膽の冒險者なきにあらざるも、彼の航海者に伴ふ同し確實と安全とを以て氷塊を流すの地域を横斷し得るに臻りしは、實に登山術の發明せられたる以後にして、然かも氷山浮漂する兩極に於ける、異例なる氷流界を横斷するの術は、未だ發明せられたるを聞かざるなり。

曠大なる沙漠を横斷するは、亦初代の人類か企て及ばざりし所にして、彼の「沙漠の船」を發見し、之れを馴し、或は「ヲーシス」を探撿し、如斯して僅かに通行し得るの道路を其中に見出すが如きは、實に遊牧者時代の勞効たらずんばあらず。假令歐羅巴の旅行者といへども、沙漠行の術の須要なる智識と經驗とを有せずして、アラビヤの大沙漠ダナを横斷せんと試むるものあらば、必ずや中途に亡死するを免がれざるべし。而して森林旅行の如きも、或る時代に於ては異例なる經驗を要せしなるべく、又濕地旅行、其他特種なる地域を旅行するに當りて、悉く然らざるは無し。

斯くて地理的探撿には、種々なる旅行術の存在するを看るに臻れるを證明せられたり。而して吾人は只斯等の旅行術の一にして、最後に生れたるもの――登山術――を考察すべし。思慮なき讀者は、恐くは是を以て最も無必要なる用意と爲すべしといへども。然れども無必要なる文字は只想像の上より來れる語のみ。高き地域は吾人の將に開拓すべき科學上の秘密を保藏し自然を愛する者の爲めには『美』を有し、又途に經濟上緊要なるものを有するを證明せらるゝに至るべし。識らずや、カラコラム山脈(亞細亞に在り)の高處には、他日金を發見せらるべしとは既に確實なる證據の存するとを。若し一朝金を發見するに至れば、之れが採掘を防遮するの困難ならざるが故に、直ちに其工事に着手するとを得べくして、問題は唯だ登山術の知識を收得したる人員の編整如何にある而已。

登山術は近時の發明にして、千八百五十年の頃は未だ之れあるを看ず。千八百七十年の頃には既に著るしき進歩を顯はせりといへども、現時に迨んで尚完成せりと云ふ能はず、其完全なる發達は、將來の登山者及山嶺探撿者に負はざる可からず。萬古積雪の中に埋沒せらるゝ地域に對し、吾人が懷きたる譯もなき畏怖心は、

組織ある探検の起りし以前に於て已に消亡せられたるべし。去れど古昔に在りては勿論、彼の未開の種族の如き、今日といへども斯る畏怖心を存し、異奇難解の天然力は、猛悪なる妖魔の働きなるべしとの信仰を懐けり。メソポタミヤの郊野に突如として起る暴風雨は、カルデヤ人の心には魔物の通行するが如く思はれ、宿家もなき荒漠たるチベットの住民は已れの周圍には人目の看る能はざる無數の惡靈ありて、恒に已れ等を滅亡せしめんと窺ふものありと想像し、斯惡靈の毒計を防禦せんが爲にはあらゆる手段を盡すと聞く。又ヒンヅー、カッシ(亞細亞に在る山)の種族は、積雪界を以て人を狂氣せしむる靈女の住家なりと信ぜり。如斯き想像は、アルプス山中の種族をして、近き頃迄、山谷の隱所に怖ろしきドラゴンありて、積雪界の途を閉塞し、時々森林の頂上に顯れ出で、日暮れて歸途を急く樵夫を駭かすとありとの信仰を强からしめ、トラゴンの想像消失したる後といへどもアルパイン山の住民は雪野と、高き巖角とは、惡魔の住家なりと想像したりき。而してマッタルホルンの峯嶺には今も惡魔の住めるものと信ぜられ、惡魔が此處より超ゆる能はずと思惟せられだるブラック湖畔の禮拜堂は、今尚ほ毎年各地より參集する巡禮者が、祭壇を設けて神助を祈り、永くゼルマット地方(則ち彼等の住する所)の擁護を仰がんとする所なり。

壯士慘不驕

(口絵の絵解き)

壯士慘として驕らず、夜深けて敵を候ふ。旅順城下鳳凰廳外の秋、方に憶ふに堪へたる哉。恰かも是れ『黃沙戍下悲笳發し、蕭條夜靜に邊風吹く』もの。

時事一斑

出征者に送るべき書信

懸軍萬里數萬の將卒は、今や滿州の野に露營す。或は鄕夢の海を飛んで來るもあるべく、或は遠く雁信を寄せんと欲するもあるべし。

目今當事者が出征の人に送るべき書信の手續きを定めたること下の如し。

一留守宅ゟ出征者の私信は每周金曜日を以て(一音信二匁以內に限る)其の地に在る留守、官衙若くは補充隊に差出定規の印紙(內地と同樣の定規)を添へ(各人每に貼用せしめず)該信書の發送方を依賴するを得

但本文の官衙部隊を距る遠隔にして郵便を以て依賴する時は中に二錢の印紙を封じ込むべし

一留主、官衙若くは補充隊に在りては每周土曜日前項の信書を取集め受信者の部隊每(假令ば步兵第一聯隊付某及野戰砲兵第一聯隊附への信書は共に第一師團司令部へ宛つる事)に一括し一の大なる狀袋に入れ各自より出せし印送を其上に貼用したる上東京府下(工兵隊を除く)にありては兵站司令部へ出し發送せしめ其の他の地方にありては直ちに郵送の取扱を爲すものとす

但し狀袋の上には留先の地各部隊及發送官衙の地名及び名稱を詳記し(軍機上秘密の事柄にして表記するを忌むものは避くべし)且つ受信部隊已に宛所に居らざるときは出向先へ送附方を賴むの旨を附箋し官衙の名を署すべし

而して其書方は、

在外第何軍何部
何官(何職)何某

在外何師團何部
何官(何職)何某

在外第何師團第何旅團何兵第何聯隊
第何大隊第何中隊何小隊
何官(何職)何某

在外帝國艦船何々號
何官(何職)何某

國民の品性

國民新聞が國民の品性を論ずる語に云く。

武器の精英腕力の猛剛のみ必しも國民の運命を決すべきものにあらず。武器の外、腕力の外、一大至剛の力ありて存す。國民の品性是也。

普佛戰爭の時、人あり兩軍の幕營を窺ふ。勝利を得たるビスマークは、舊約聖書を開きて、上帝に祈り、敗北したる小奈翁は小說に耽りて欝を遣りしを見、斷案を下して曰く、兩軍の勝敗偶然にあらずと。請ふ之を以て一場の閑話となす勿れ。天を敬して國を憂ふる重厚なる國民と、浮華なる國民との性質を、巧みに畫き出せるものにあらず耶。小奈翁の爲めに浮華誇耀の氣を鼓せられたる佛人は、未だ鋒を交へずして己に敗れたるもの也。

看護婦と清國捕虜

赤十字社には清國の捕虜患者數十名ありて、其全癒せし者は次第に佐倉分營に移送する事なるが、去る十一日も八名の捕虜を佐倉に廻送せしに、捕虜は去るに當りて皆な看護婦の前に來り叩頭平身し、只管謝辭を敍べて容易に去らざりしと。彼れ清人も我が博愛なる赤十字社看護婦の厚情には感泣し居たるなり。

彼女等は彼等の初めて來りし時、不潔汚穢云ふ可らざる程なりしも、毫も之を厭はずして叮嚀に看護し呉れ、其の廻送せらるゝや靴足袋襦袢等を惠與したりと云ふ

戰爭と赤痢

去ぬる六月上旬に我軍始て朝鮮仁川港に上陸してより十月三十日に至るまでに、戰死幷に病死者總數將校下士兵卒及び軍夫を合せて六百五十餘人、中成歡、平壤、

虎山、大連灣等の諸戰に討死したるものは二百四十餘名なりと。而して戰死者の中六十餘名は負傷治療中に死亡したるものに係る。

然るに本年一月以來赤痢病に罹りしものは總數十四萬人にして、中死亡三萬人なり。又昨年中の同患者は十七萬人、中死亡者四萬人に及べりと云ふ。

然らば赤痢病の恐るべきこと戰爭よりも恐るべく、其苅入力の大なる支那兵の苅入力に數十萬倍せりと謂ふべし。これにつきても衛生の注意の如何に大ならざるべからざるかを知らん。

兩羽震災の損害

去月二十二日に於ける兩羽震災の損害は、

	全潰家屋	半潰家屋	燒失家屋	死者	負傷者
飽海郡	一四七二	未詳	一三三一	三九九	五九八
東田川郡	八九五	五二七	三三	一八〇	一〇三
西田川郡	一二五	一〇二	七二	六三	七八
合計	二五〇二	—	一四三八	六四二	七七六

其死者の如き、日清事ありて以來の出征死亡者に敵す。亦驚ぐべき損害ならずや。

日本の戸數人口

日本の戸數人口には昨末の調査に、戸數七百八十五萬九千二百十八戸にして、人口は四千百三十八萬六千二百六十五人なり。

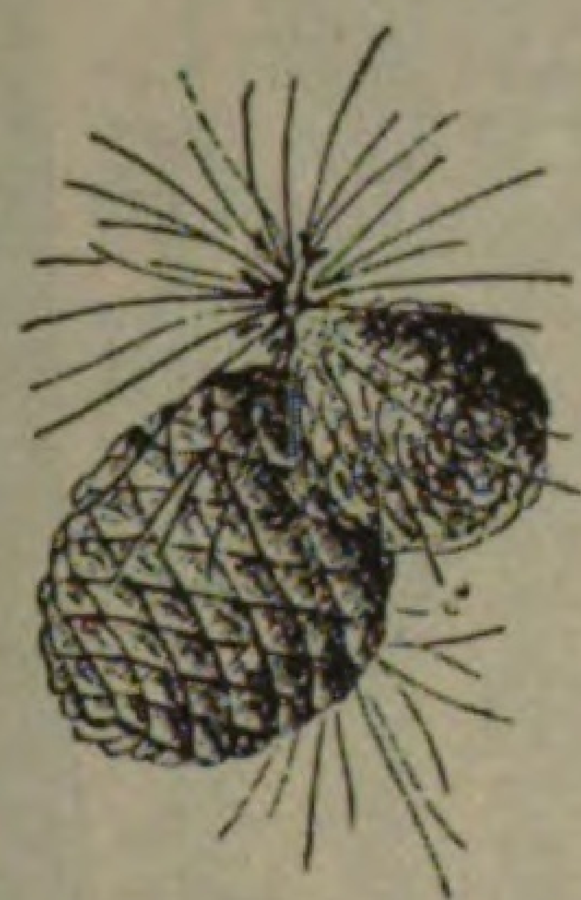
其中、男二千九十萬五千三百五十九人、女二千四十八萬九百六人。

若し族籍を以て之を分たば華族三千九百五人、中戸主五百九十九人、家族三千三百六人にして、士族二百二萬四千三百十八人、内戸主四十三萬二千七百十三人、家族百五十九萬千五百八十七人平民三千九百三十五萬八千五十人、中戸主七百八十七萬五千六百二十二人、家族三千百四十七萬六千七百八十一人なりとす。

又棄兒の他の養子女とならざるもの四千四百二十二人あり。在監無籍人千二百二十五人あり。

今之を前年に比すれば、戸數に於て四萬千六百四十八戸、人口に於て二十九萬六千三百二十五人、中男十五萬二千九百九十三人、女十四萬三千三百三十二人を增したり。亦膨脹日本の一現象なるべし。

明治廿五年九月十四日逓信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行